角海家に期待されること

１、常に２重の機能を兼ね備えてきた不死鳥の建造物である。
角海孫左衛門は１８４３年から７隻の船を持つ回船問屋として日本海貿易の主役として商いをしてきた。
家屋は明治４年の大火で焼失したが翌年に再建された。
家屋の構造も漆喰で固めた外壁の上から下見板張りをはり、防火機能と海からの潮風による侵食からの防止をかねるとともに、木肌は美観、人の肌触りを満たしている。
このように機能と美観の２重の機能を備え、大火という災害から復旧し、今又震災という災害から復旧しつつある姿は不死鳥のようであり、黒島のゆるぎない再生のシンボルである。

２、黒島地区の空間構造上の中核である。
黒島地区は空間構造上３つの領域から成り立っている。
街道を中心とした集落、街道沿にそった連担集落、集落を取り囲む海、山の自然。
これら３層の空間構成の中心集落のなかの中核施設である。

３、シンボル・情報発信基地・防災拠点の３つの機能としての位置付け
石川県復興プランは安心安全な暮らし、地域産業の再建、復興と持続可能な地域づくりを目標としている。
これらの３本柱が地域の中心核としての角海家再建に集約される。
①安心、安全な生活支援の場として日常交流活動と災害時の防災拠点としての２重の機能を併せ持つ防災拠点と位置づける。
②産業復興として農林漁業、中小企業、商店街復興の支援の場としての情報交流、情報発信基地といちづける。
③持続可能な地域づくりとして、コミュニティー拠点であり、能登黒島地区ブランドの拠点として位置づける。

４、シンボル機能
角海家を歴史的建造物として復元すると同時に、日本海貿易の主役であった北前船を復元展示し、建築と歴史文化の研究拠点として次の世代へ伝えていく。また地域の歴史的街並、自然の活用のシンボルとして、環境対応型地域活動の支えとする。
歴史文化を伝え、未来へ向かって活用できるために全国の小学生の歴史文化研修所を儲け年間を通して能登の自然に触れながら合宿活動をおこう。そのために隣接敷地に、研修合宿施設を設ける。

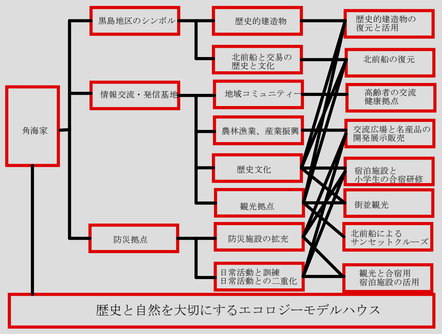
５、情報交流・発信機能、
地域コミュニティーの中心として、高齢者の交流の場として活用するとともに能登地域の歴史的な衣食住文化の掘り起こしを行い、新たな名産品の開発通じて農林漁業、産業振興を行う。
さらに能登地域の観光拠点の一翼としての整備をおこうなう。
北前船による日本海文化は今後環日本海文化として、ロシア、中国、韓国等国際的な広がりとして発展していく。
これらの観光資源を活かし、国内外からの観光客誘致を積極的に働きかける。そのための隣接地に宿泊施設と
イベント広場を整備し情報交流、発信基地とし、観光客誘致の一環として北前船によるサンセットクルーズを行う。

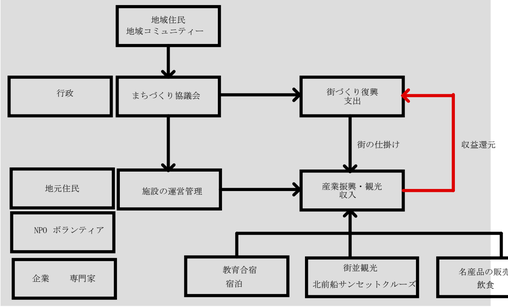
６、防災拠点機能
日常的な活動空間が災害時の非難救護拠点となるよう防災施設整備と日常的な訓練をおこなう。
そのため隣接地に併設される研修、宿泊施設、交流広場には防災備蓄を設け、通信機能、大人数の収用機能をもたせる。

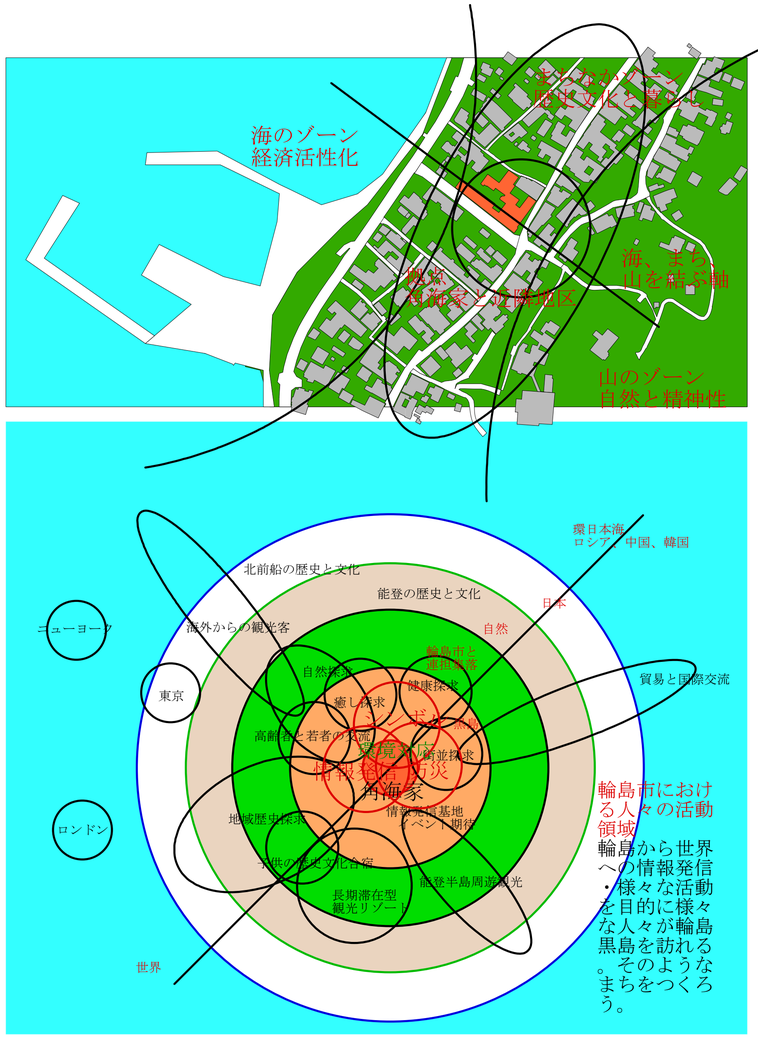
７、施設の管理運営
施設の管理運営はまちづくり協議会と地元住民が中心となり、
専門家、外部の団体、ボランティアの協力を得て実施する。
地元住民のなかでも高齢者による積極的な参加が必要である。

８、収益構造
歴史的建造物の運営管理、歴史文化の研究、研修に当てるため、隣接地の宿泊施設、北前船によるサンセットクルーズ、
交流広場による物販の収入を拡大する。

９、提案
①歴史的建造物の復元と活用
②歴史と自然を大切にする環境対応型エコロジーハウス
③北前船の復元
④宿泊施設整備
⑤交流広場整備
⑥防災機能の拡充
⑦地域の高齢者の交流会の実施
⑧全国の小学生の合宿研修に実施
⑨国内外の観光客を対象とした北前船によるサンセットクルーズの実施
⑩さまざまな人々、団体との連携による施設管理運営
⑪観光収入、物販収入による収益構造の確立

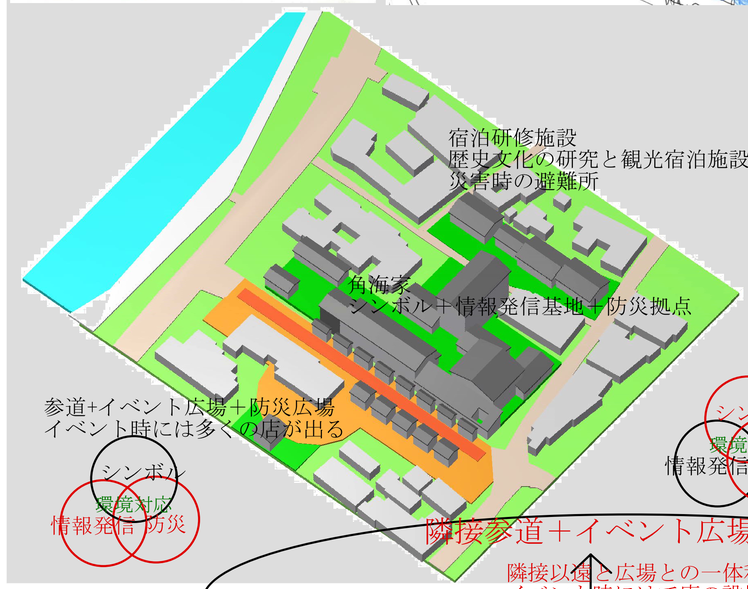


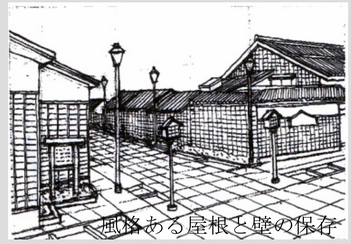



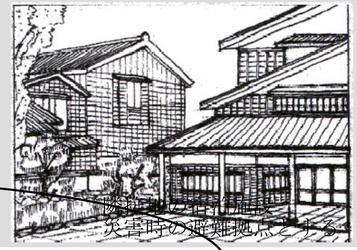




## 角海家　歴史と自然とマナーによる環境対応型住宅

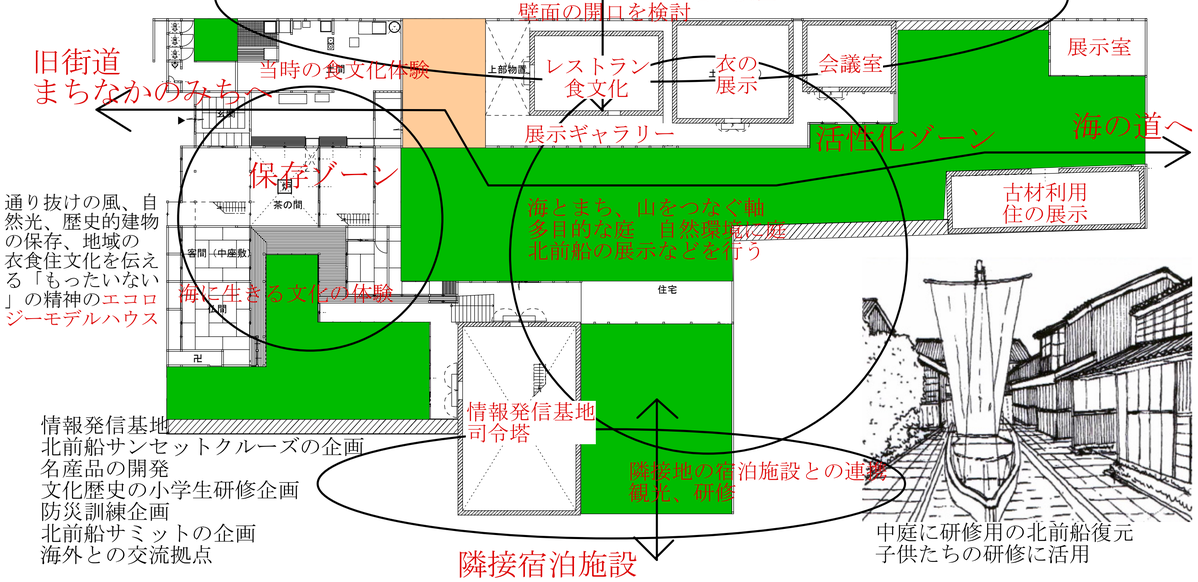
古い家、もの、作法を大切にし、農林漁業や太陽、風、雨などの自然の恵みをいかし、「もったいない」の精神に基づいた生活拠点としての環境対応型エコロジーモデルハウス




隣接以遠と広場との一体利用
イベント時にはで店の設置
壁面の開口を検討




情報発信基地
北前船サンセットクルーズの企画
名産品の開発
文化歴史の小学生研修企画
防災訓練企画
北前船サミットの企画
海外との交流拠点

シンボル
環境対応
情報発信 防災

# 歴史文化のシンボルとして黒島の未来を開く角海家

シンボル＋情報発信基地＋防災拠点「もったいない」の環境対応住宅

輪島市黒島地区復興まちづくりコンペ　第２部門